

第六章

窮通（きゅうつう）は命（めい）有るが如し

開元八（七二〇）年。

春の終わりに至っても伏せて過ぐす日が多い。時に復調に向かいつつあると感じても、見せかけの小康のようでもある。

三十二歳という年齢で終わると定まっているのならば抗うのはもとより無駄だと、定めに素直に従う気にもなっていた。危地からはどうやら脱したらしく思えたときに、これで死ぬのは惜しいとの強烈な感情が湧いた。時に晩春の花の下を歩けるようなこともあればなおさらだ。再び死の淵に臨むのは御免だ。

背中の痛みが顕著な病状の一つで不調は全身に及ぶ。「どうか効くと思ってお飲み下さい」。弟の孟洗然にいつも言われる薬は、今朝は飲みさしのままだ。

いまの南園にとってこの薬は容易に手に入れられるものではない。心して飲まなければいけないとわかっていても、うんざりするほど親しんだ味に手を伸ばす気にならない。榻の上で身を斜めにし、衣を被って窓の外を眺める。

日が高まるにつれ若葉の輝きが増す。その明るさが屋内にいる自分をも照らし、元に戻ったような気分になる。それは一瞬だけで、事実としては、山野を自在に跋渉していたころとはまるで他人の自分が存在している。季節は春から夏へと進もうとしているのに、独り自分は同じところに留まっている。外の世界がせめて芽吹きのあるところであればまだしも、どの木も葉を開いた後になつては、今さら追いつけない。今年の春はすでに失われたのだから、これからの季節も失われてしまうのだろう。

目を閉ざすと、これまたうんざりするほど親しんだところに落ちて行く。定めと受け入れられたころはまだよかったのか。先への執着が生まれると、いまさらどうにもならない過去を想う。つまりは悔恨だ。三年前の八月の岳陽楼（かくようろう）。あの瞬間に二つの道が交差し、我が行く手には洋々たる

前途が拓けるはずだった。

叔父の孟敬規と万山に登ったのは四年前の九月。その半年後に旅に出た。

その日の朝に張野人の小屋に行くと、鹿門山に初めて登ったときと異なり、張野人は何の用意もしていなかった。意外に感じつつ、「自分の翼で鳥のように飛んでは行けませんので」と、舟を頼んだ。「舟が翼の代わりになるとしてもですな、我等は生きるに面倒をせねばならぬ存在。鳥のように行く先々でそこにある餌を啄む訳にはまいりますまい」。「ここにいくらか担いでまいりました。叔父貴が魚を釣ってくれば当面はどうにかやりすごせましょう」。背中の荷を示すと、張野人は重さを量り、「細く長くもたせて、十日分ありましようかな。これですと、近場を巡るくらいでしょう」。「これでも容易ではなかったのです。岳州までなら足りませんか」。「洞庭湖見物ですか。結構、結構、坊ちゃんも洞庭湖は見ておくべきです。洞庭湖にまで行って帰って来

ないのならなおのこと結構。となると、こればかりではどうにもなりませんな。「向こうに着けば、きつと何とかかなります。叔父貴に謝礼を差し上げることだってできるでしょう」。「坊ちゃんから漕ぎ賃を頂戴する気は毛頭ありませんと、格好を付けたいところですが、隠者面をしても、もとより欲の深いあつしです、いい儲け話なら喜んで加担しましょう」。張野人が本心でないのは明らかで、「とにかく舟を出して下さい。漢水の流れに舟が乗ったら詳しくお話します。それでどうしても気が進まないのなら、そこらを巡って帰って来るのもいいです」。「坊ちゃんも企めますな。流れに乗ったら、引き返さないと思っただけなのでしょう。あつしは、行きたくうずうずしています。ここで聞かせていただきますでしょう」。「わかりました。簡単と言えば、張説様からお招きがあったのです。だから、岳州に参るのです」。「ほほう。成程、よさそうな儲け話ですな。聞いてますます行きたくなくなりました。で、出発は五年先ですか。十年先ですか」。「私だって迷いました。いつまでも迷っていても埒が明きません。自分を試さなければ何事も始まりません。とにかく

く岳州まで行って、そこで決めようと思うのです。「流れに乗ってしまって、後戻りがきかないようにするのですな」。「南園の状況もあります」。「それを言われますとな」。「すまない。行けば必ず開けると思っています」。「あつしは坊ちゃんに弱いのです。断り切れるとは最初から思っていないせん」。

張野人の舟で漢水を下り、鹿門山が後方に消えると、不意に身も心も竦んだ。一筋の道から永遠に切り離されてしまうのではないのかと感じ、これは、単に初めて襄州を離れることから生じる不安でしかない、思うように努めた。一筋の道は鹿門山だけにあるのではない、浩然の気は天地間に充満していると、自分を奮い立たせようとした。

張説は、その四年前の開元元（七三三）年夏に、玄宗皇帝に佩刀を送った。皇帝はそれによって決意し、叔母の太平公主を倒して新政権を樹立し、すぐに張説を宰相として迎えた。則天武后の時代から硬骨漢として名を知られる張説は、新政権の重鎮に据えるにふさわしい人物だった。ところが、その年の十二月に張説は地方に転出となった。直接の理由は、皇帝の異母弟の李範

(りはん)と親密な関係を持つとしたのは皇帝への忠誠心に欠く不穩当な行為だとされたからだ。実際には、張説が新政権運営の阻害要因になりつつあったからだ。宰相の重要な任務の一つに人材の登用がある。張説は貢举出身者で、国家の重責を担う者はすべからず学問に優れた者でなければならぬと考えていた。玄宗皇帝は、日の浅い新政権に必要なのは、学問よりも、国家を安定させるための政策を着実に遂行する実務能力だと考えた。玄宗皇帝は姚崇(ようすう)を抜擢しようとし、張説は、姚崇は凡庸で用いるに値しないと頑なに反対した。玄宗皇帝は、姚崇に十分に力を發揮させるために張説を外に出した。

張説が引き上げた一人に張九齡(ちやうきゅうれい)がいる。張説は、則天武后の時代から左遷を何度も経験し、遠く南方に流されたときに、張九齡の才をひと目で見抜き、都に送って貢举を受けさせた。張九齡は優秀な成績で合格し、玄宗皇帝の新政権で中堅官僚として用いられ、張説が失脚しても重要な職務を担い続けた。姚崇が新たに宰相になると、純厚こそが肝要であると

の趣旨の文書を差し出して、姚崇を感嘆させた。第二、第三の張九齡にならんとする若者は、張説が地方に出たのをむしろ好機としてその門を叩いた。

開元五（七二七）年八月、孟浩然是張説に連れられて岳陽樓に登った。樓上から臨む洞庭湖は天下無比の絶景とされる。張説は春に岳州に赴任して以来、才士を呼んで岳陽樓で詩を詠ませ、優れた詩を選んで額に記して樓の最上階に掲げ、これからの詩が歩むべき方向を天下に指し示そうとしていた。我こそはと思う者は挙つて張説のもとに詣でて詩を献じ、孟浩然のように招かれたのならばそれだけで大きな名譽だった。

孟浩然是簡素な旅姿のまま張説の前に現れた。鹿門山の隱士にはそれがふさわしかった。張説は自ら孟浩然を樓上へと案内した。褚先生の教えはまこと心強く、初めて大官の前に出ても、自然と礼に適った振る舞いができた。張説は五十一歳、数多の政争を切り抜けて来た猛者であり、孟浩然是郷里を初めて離れたばかりの二十九歳の若者だった。張説の前でいかなる詩が詠めるのか、いざその時が来ると、さすがに平常心ではいられなかった。「ここが

最も眺めのよろしいところ。心おきなく御覧になり、心に適うところがあったならば、詩を詠みなされ」。

見せるための詩をあらかじめ用意しては来なかった。先に詩を作ってから鹿門山を登ったりしない。歩いて初めて詩が生まれる。詩は自ずと生まれ出るものだと自分のなりの信念があった。しかし、慣れ親しんだ鹿門山の道と、名にし負う洞庭湖とは同じではなかった。

一層登ることに、洞庭湖はあくまでも広くあくまでも平らであった。口から発すれば直ちに消える片々たる言葉で、その大きさや永遠性をどうしたら表現できるのか。先にこの楼を登った者の詩があった。そのどれ一つとして、目のあたりにする洞庭湖に釣り合うものはなかった。詩はあまりにも小さすぎる。

張説は、孟浩然の隣でしばし湖を見てから、ゆっくりと離れて行った。その気配に、孟浩然の心が高ぶり始めた。自分自身を、自分の詩を試すためにここに来た。これまでの全ての詩を凌駕するものをここで詠む。そうすれば、

二つの道が交差し、新たな道が開ける。

心の高ぶりは、詩が生まれ出るのを妨げた。洞庭湖はいよいよ大きく、言葉はいよいよ小さく、一つの字句さえ浮かばなかった。「何のことかさっぱりわかりませんな」と言った張野人の顔が思い出された。気乗りしない張野人に舟を漕いでもらってここに来たのは間違いだったのか。一筋の道は鹿門山にしかなく、ここには繋がっていないのか。自分は鹿門山の道をぶらぶら歩いて、気楽に詩を詠んで過すだけの男なのか。南園のために何かをしようとか、天下のために我が身を役立てようとか、そのようなこととはもとより無縁なのか。

張説が詩額を見つつ歩く足音が、あたかも孟浩然をせかすように楼上に響いた。結局、自分は過去の誰にも及ばないと、詩を放擲しかけた。気持ちの高ぶりは消えた。

ふと見ると、楼の外の中空に父が立っていた。どうして父がそこにいるのかとも思わず、父がすでに他界しているのも思わず、「何ですか、普段と少し

も変わらないではありませんか」と、父の背に向かって言い、一人笑った。父が見ているのは、いつもの岷山ではなくて洞庭湖なのに、それにも気付いていない様子だったからだ。一体何を考えているのか、父はいつもわからな
いと思うと、その父に自分になっていた。岷山も洞庭湖も宇宙の初めからあり、最も馴染みの深い例の気が満ちているのだった。

八月湖水平　　八月の湖水はあくまでも平らに広がり

含虚混太清　　虚というものを含んで大空と一つになっています。

気蒸雲夢沢　　浩然の気が雲夢の沢を蒸し上げ

波動岳陽樓　　洞庭湖の波が岳陽樓を動かしします。

詩が浮かび出た。「太清」は道教の言葉で虚空、「気」は浩然の気、「雲夢沢」

（うんぼうたく）はこのあたり一帯の古名。

口を衝いて出て来た句は一旦そこで尽きた。楼の外に立つ自分の足元から洞庭湖の上を渡って行く莊嚴な道が目の前にあった。

父の背を叩いたのは母ではなかった。

張説が言った。「いまの詩は、ここで興に誘われて詠んだのですか。それとも予め用意されて来たのですか」。「たったいま思ったままに詠みましてございます」。「成程、即興の詩でなければこうはなるまい。しかと即興の詩であるのならば、岳陽楼第一の詩としてここに掲げたいと思う」。

孟浩然是新たな道へと歩み出るべく、張説に促されて続きを詠んだ。

欲済無舟楫　　ここを渡って行こうとしても舟楫はなく

端居恥聖明　　聖天子の御代に端居していることを私は恥じます。

坐觀垂釣者　　釣り糸を垂れる人をそぞろに見ては

空有羨魚情　　釣り上げられて世に顕れる魚を空しく羨むのです。

詩は完成した。我が耳がそれ聞き終わったとき、目の前の道は消えていた。

踏み出した足は、置く場のない中空に取り残された。

張説によって釣り上げられる魚になりたいと宣言した。南園のために毛公となり、天下のために身を役立てるには、そうするのが最もよい。

張説は言った。「これは間違はなく即興の詩であるな」。「いま思うままを詠

みました」。「約束通り第一の詩としてここに掲げよう。洞庭湖を詠んだ天下第一の詩であると、誰もが認めるだろう。しかし、そなたは、それを誇りとはしなくなるだろうな」。張説は、褒美の品を渡すよう従者に指示すると、そくさと楼を下った。褚先生の教えのお蔭で、孟浩然是礼に適った振る舞いを岳陽楼を辞すまで続けられた。

岸边に戻ると張野人の舟はなかった。岳陽楼に登るために陸に上がったとき、張野人は孟浩然の背に「斉(せい)に久しきは我が志にあらざるなり」とつぶやきかけた。張説に会うことで心がはやり、気に留める余裕がなかった。

孟子の言葉だ。孟子は、五十歳を超えてからの数年を斉の国で過ごした。王と会う機会を与えられるたびに理想とする王道政治を説いた。王は聞いてくれはしたが、現実の政治にそれが反映されることはついになかった。孟子は斉の国を去るに当たって、「斉に久しきは我が志にあらざるなり」と言った。斉の国では自分の理想が実現しないと初めからわかってはいても、現実を見回すと、斉の王をおいて他に王道政治を行う力量のある君主はいないのだから

ら期待をかけるしかなかった、という意味であった。

張野人の舟のない湖岸に孟浩然是悄然と立ち、あの時点で張説が声をかけて来なかったならば、別の詩になっていたのではないかと思った。万山で叔父と話して旅に出ようと考えたことの帰結はこうでなければならなかったのか。

いつしか孟浩然是夕闇に包まれ、ふっと気付くと、張野人が脇に立っていた。「あつしは坊ちゃんには弱いのですな」。岳陽楼であったことを生かされると、「大した眼力ですな。天下第一の詩を詠んでしまったからには、進むにしても、退くにしても、いずれにしても、坊ちゃんは悔やむしかないということでしょうな」。「それ以上は言ってくれるな」。張野人は容赦なく、「万一望み通りに釣り上げていただけたならば、これから先、岳陽楼の詩を超えるはずの詩がすっかり失われるのを悔やまねばならなくなるでしょうし、釣り上げていただけなのならば、隠士の名を自分で汚したのを悔やまねばならなくなるでしょうな」。

しばらく岳州周辺を旅して、鹿門山の外にも一筋の道があるのを自身の詩で証明しようと虚しい試みをし、一つの決意をして南園に帰った。「斉に久しきは我が志にあらざるなり」と、今度は自分で言うようになるだろうとの予感はあるけれども、進まなければならなかった。南園に戻ると、弟は安堵の顔を見せたが、母は農作業の手を止めもしなかった。張説が与えてくれた褒美の品で、まずは勝手に持ち出した食糧を弁済した。

張説は約束通り、洞庭湖を詠んだ第一の詩として岳陽楼に掲げた。張説の影響力は大きく、その詩はすぐに広く知られた。張説に釣り上げられて立身出世を遂げたいとの願望を天下に公言した孟浩然は、もはや鹿門山の隠士ではなくなっていた。後には戻れない。詩によって必ず都に雄飛するというのが孟浩然の決意だった。

そうするのは南園のためだとの思いが強かったにもかかわらず、南園の人々の視線は温くなかった。詩で褒美を得て、自分ばかりが良い目を見ていと悪く言う者がいた。孟四とは断絶状態が続いていた。孟四に遠慮して貢

拳を受けないでいるとの真意は孟四には伝わらず、苦しい試験を避けて、自分に対する当てつけのようになりまいことをして得意がついていると憎まれた。

詩友として交際を求め者が数多く現れた。機会のある限り交流の幅を広げようとした。弟は「無理をなさっているのではありませんか」と心配した。兄は「詩を作って好きに遊んでいるだけだ」と、人々が批判する通りに自分を笑った。

新しい知人が増える一方で、旧い友とは距離が生じた。鹿門山に白雲先生を訪ねてもかつてのような境地は得られず、我が身を山に置くのは山を汚すような気がして、自ずと山から足が遠のいた。張野人と会っても、ぎこちなく二三の言葉を交わすだけとなった。

張説によつて釣り上げられるということはやすやすとは実現しなかった。張説は才を誇つて傲岸不遜で政敵が多い。孟浩然のように頼るべき縁故を持たぬ若者が張説の周囲に集まるのは、朝廷の多数を占める門閥出身者の目には、いささか安心できない動きと映る。張説が中央に復帰するのは容易では

なく、孟浩然はじっくり待たねばならなかった。しかし、一旦進み出したからには、早く毛公のようにならなければいけないとの焦りが生まれ、無闇と急ぐようになった。張説に釣り上げられる魚になりたいとの願望の表明からさらに進んで、自分の窮状をあからさまに訴えて助力を仰ぐ詩を作って都の新しい知人に次々と送り付けた。先方は多少の同情を寄せてはくれても、そのような詩を喜びはしなかった。

南園の人々にも、要路の人々にも自分は理解されていないと感じ、一層のこと焦燥感に駆り立てられた。

郷曲無知己　郷里に私を知る人はなく

朝端乏親故　朝廷にはあなたの他に親しい方はおりません。

そのような詩句は鹿門山の隠士の吐くべきものではなかった。

さらに、昨年の春、孟浩然にとって辛い打撃となる話が都から聞こえて来た。

その前の年に、都のお膝元で行われた地方試験において一番の成績で合格

したのは二十歳を超えたばかりの王維（おうい）だった。王維は単身上京し、十七歳の重陽の節に、遠く故郷の兄弟を想って詠んだ詩で一躍有名になった。孟浩然が万山に叔父の孟敬規を誘った一年前だ。王維のその詩は平明で、兄弟を想う情は深く、叔父から冷淡だと指摘されたときには王維の詩が脳裏をかすめた。王維は琵琶の名手でもあり、立ち振る舞いが美しく、たちまち都の貴顕の間の寵児となった。なかでも玄宗皇帝の異母弟の李範に可愛かられた。張説が親しくしすぎたと咎められたのと同じ人物である。

都から流れて来たのは次のような話だった。李範は、地方試験を間近にした王維を呼び寄せ、用意の錦繡の服を着せると、ある公主の屋敷を訪ねた。公主は皇帝の娘で、李範とは叔父と姪の間柄だ。李範は公主と盃を交わし、「酒の肴に琵琶の新曲をお聞かせしたいが、いかがか」と、その名を明かさずに王維を呼び入れた。王維は新しく作った曲を披露した。公主は曲のすばらしさにも琴を奏でる風姿の美しさにも心を打たれた。「この者は詩も得意です」。李範は詩巻を差し出すよう王維に指示した。公主は一目見て驚愕し、「日

頃から私が誦して習っている詩ではありませんか。昔の人の佳き作と思っておりますが、この若者が作ったのですか。これだけの才があるのですから、きっと貢挙をお受けになるのでしょうか。」「この者は、困ったことに気位が高く、解頭にならないのなら試験を受けないと申しているのです」と、李範は笑った。地方試験、すなわち解試の首席合格者を解頭という。実は、都で実施される解試の成績を左右する鍵を公主が握っているのを李範は知っていて王維を連れたのだった。公主はその年の解頭を張九臯（ちよう きゆうこう）という者にするよう、試験の責任者に強く働きかけていた。「私にそのようなことを言われましても」と公主は笑って聞き流したが、李範が帰るとすぐに試験責任者を呼び付け、王維を解頭にせよと指示した。

この話がどこまで事実であるかわからないが、まことしやかに襄陽にまで聞こえて来るのは、都の実情を反映しているからなのだろう。王維の詩はすばらしい。それだけでは試験で優秀と認められるには不十分だ。都で有力者と交流を深め、皇帝に近い人々の助力も得なければならぬ。都を追われた

張説にすぎり、襄陽から人の喜ばぬ詩を送り付けていたのでは、決して目の見ることはあるまい。このようなことをするのが自分の本意だったのだろうか。

万山から鳥を追った旅は、二つの道が交差したと思った瞬間に虚空で行き場を失った。中空でもがき、焦れば焦るほど力を消耗し、力が尽きれば地上に叩きつけられるしかない。心が碎かれ、体も碎かれ、死を眼前に見るに至った。

病床にあつて、悔恨の種に水をやって大きく育てるのは、幾度繰り返しても意味がない。うめき声とともに身を起こし、気を紛らわしてくれそうなのを窓の外に求める。

あいにく陽光はまぶしすぎる。しかもこのようなときには得てして見たくもないものが目に飛び込んで来る。一匹のいつもの猫が、植込みの下から現

れ出ようと、首を覗かせる。顎をしゃくり上げ、あたりをぎろりと見回す。いかにも「よし」とうなずき、のっそりと這い出す。身をゆすり、おもむろに歩む。斜めに肩をせり出し、威張ったなりで、庭の中央に来る。足を止め、首をもたげ、ぎろりと目を光らせる。その視線は、窓の奥にいる孟浩然にも及んだのにもかかわらず、「貴様なんぞに用はない」といった風で、するりと素通りさせる。猫はうなずく。「別に変わったことはない」。先ほどと同じ足取りでまた歩く。

無視されたからというのではないが、孟浩然は、むっとする。榻より立ち、窓から首を出す。猫の耳がわずかに動く。足取りは変わらない。孟浩然は、さらに不快になる。丸々と肥えた図体も、艶々と輝く毛並みも気に入らない。良いものをたっぷり食べ、ふてふてしくもこの一帯を自分の領分である得心得ているらしい態度は、まさしく飼主を思い起こさせる。

孟演の猫だ。南園で唯一輝く建物に孟演が来るのは年に数回足らずで、いない間の留守居役を買って出ているのではあるまいが、猫は始終そこらを巡

回している。これは特に珍奇な猫であるらしく、さる貴人から金帛では表し切れない謝礼として孟演が受け取った。それを無造作に放し飼いにしているのが孟演らしい。うっかり傷付けでもしたら事だと誰もが及び腰であるから、猫はますます凶に乗る。

陽だまりを選んで腹ばいになり、毛づくろいを始める。大きな鬚面は飼い主を連想させる。見たくないのに、目が離せない。猫の方は、見られているのは先刻承知ですという態度で、相変わらず孟浩然には見向きもしない。猫のこの態度は主人に習っているのか。孟演は南園に來ると、胸を張って傲然と闊歩し、礼に厳しい楮先生でさえ、孟演の姿を認めると、自分から遠く避ける。

孟演の商売はますます繁昌し、襄陽に商売の本拠地を移してさほど長くないのに、町の顔役の一人と目されるまでになっている。南園の経営に直接口出しはしないが、大きな力を及ぼしている。南園には、南園老以来、戸籍に登録されていない人間が少なからず存在する。それらの者が、やはりお上に

知られていない土地を耕すことで、南園の繁栄が維持されていた。主としてそれらの者の中から気概のある者が孟演に靡いてしまう。孟敬行は無策で、孟大が繋ぎ止めようと懸命に努めても、「お坊ちやまには何の恨みもないのでございませうが、私どもも何しろ苦しいものですから、昔からの御恩を忘れた訳ではありませんですが、何とも申しようがありません」と謝るばかりで、結局は南園を出てしまう。

南園老の後、二代にわたって伝統墨守を唱えることしか知らない主が続く。外の世界を知らずにいればまだしも我慢もできようが、孟演の輝く建物を毎日見ていて耐え忍ぶのは難しい。誰かが官人になれば事情が一変するとの期待も、四十年にも及んで何の成果もなければ、学舎はただ重荷でしかない。孟四は昨年の秋にまた失敗して精神を病み、孟浩然も病床にあったのでは、「勉強のしすぎだか何だか知らないが、揃いも揃ってどうしようもない。この上さらに誰か倒れるようだったら、南園はおしまいだ」と、霍大叔母がわめくのが至極最もなこととして人々の耳には聞える。

かつて孟演は「励むがよい」と孟浩然に言った。その真意は何であったのか。詩で虚名を得たところで南園のためには何にもならないと、すでに知っていたのか。

猫が悠然と伸びをするのに腹を立て、窓枠を叩く。猫の耳がぴくりと動く。「それで驚くとも思っているのですか」と言うかのように目を細く開ける。孟浩然がどうあがこうと、孟演にはどうでもいいことなのだろう。

孟浩然は壁を蹴り、自分を笑う。猫に怒ってどうするのか。孟演が何だというのだ。

猫は体を丸くして眠りの体勢に入りかけて、不意に体を縮めて身構えし、「ふん」と首を振る。「行け」。孟演に向かつては言えない言葉を発する。猫に向かつてさえ遠慮がちで小声であるから、猫は孟浩然の声には何の反応もしない。遠くをじっと透かし見てから、「しょうがない」とばかりに、耳の後ろを前脚で搔き、体の向きをゆっくり変える。大儀そうに歩み始め、花を付けた小木の下に潜り込む。

潜り戸が軋み、一人の少年が足早に入って来る。猫は姿を消す。

孟大の子の孟郊（もう こう）、亡き楊義姉の忘れ形見だ。十五歳になる。

「またあいつだ」。

猫が去ったばかりの木の蔭をしゃがむようにして覗き見てから、窓辺にまで来る。猫を平気で追い払うのはこの孟郊だけだ。

「起きておられたのですか」。

孟郊は窓を見上げ、

「今朝はお加減がよろしいではありませんか」。

と、笑顔を作る。見るからに取って付けた感じだ。

「そう見えるかい。もしかすると、そうなのだろう」。

実際に先ほどまでとは少し気分が変わったように思え、

「もしかすると、あの猫のお蔭なのかも知れない。君はどうやら怒っているようだが」。

「全くいいましいです。あいつを見ると、むかむかが半日続きます。こっ

びどくやつつけて、日の当たるところを二度と歩けないようにしてやりたいです」。

「猫にむかつ腹を立てるために来たのかい」。

「違いますとも。あんな猫などどうだっていいのです」。

「なかなかの勢いではないか。少し元気になったのは、君のお蔭だろう。そうやって怒っている顔を見ると、力が湧いて来るような気がする。だけど、君はいま時分は学舎のはずだが、どうかしたのかい」。

「どうかしたのは僕ではありません。この南園です。南園はどうかなくてしまったのです。だってそうでしょう、もう終わりです」。

孟郊は地面を踏み付ける。

「何かあったのかい」。

「あつたどころではありません。聞いて下さい。今朝はいつまで経っても先生が学舎にいらっしやらないのです。二、三日前から、御様子が何となく変でしたから、気になっていたのです。それで、二十二郎兄さんと先生の様子

を見に行きますと、門がぴったり鎖されていました。裏に回って、ばあやさ
んを呼ぶと、首だけ出して、『駄目、駄目』と怖い顔で、『先生は』と尋ねて
も、『誰が来ても追い返すように言われています』と、それだけなのです。

「誰かが先生を怒らせたのかい。また君たちなのかい」。

孟郊の劍幕をなだめようと笑いながら言う。

二十二郎とは大酒飲みの子孟敬規の息子の孟邕（もう ようだ。孟郊から見れ
ば叔父に当たるのだが、三歳しか違わず、いつも一緒に兄弟のようだ。孟邕
はなかなかに行儀がよろしくなく、先生の小言を食らう回数が最も多い。

「今回は断じて僕等ではありません。他でもありません、あの猫親父です。
猫親父が本性を現したのです。今度ここに来たときに、先生を南園から追い
出すと言っているのです」。

猫親父とは、猫の飼い主の孟演に対して孟邕が付けた仇名だ。

「本当なのかい」。

「しばらく前からそのような噂が流れています。先生のお耳にも入ってしま

ったのでしよう。猫親父に恥辱を蒙るくらいなら、自分からと。そうなるのではと、とても心配なのです」。

「襄陽の演殿は、どのようなお考えなのだろう」。

「陰險な猫親父が何を考えているのかなんて、僕等にわかるものですか。高い先生は、醜い争いを好まれません。これまでだって、猫親父が来ているときは、うっかり出遭わないように避けておられました。先生が自分で身を引いてくれたら手間が省けると、猫親父のそれこそ思う壺ではありませんか。残念なことに、南園の中でも、先生を大切に思っているのは、学舎に通う僕等くらいです。大方の人は、学舎は迷惑な存在だと見ているのです。とんでもないことです」。

「二十二郎君のお父さんがずっと前からそのように言っていた。学舎はお荷物なのだ」。

「何をおっしゃるのですか」。

孟浩然は答えずに、

「で、襄陽の演殿はいつ来られるのかい」。

「知るものですか。今度来たら、殴ってやりたいです。猫親父が来ると、皆がこせこせびくびくするのを、もしも南園老が御覧になったら、烈火の如くにお怒りになるのではありませんか。情けないではありませんか。誰もが腰抜けで、誰もがぼんくらです。うちの祖父は口を開けば、南園老が決めたことは一切変えてはならぬと言います。偉そうにそう言っていれば何もしいんですむと、横着を決めているだけなのです。本人はそれで權威を保っているつもりでしょうが、皆は『はいはい』とうなずくだけで、祖父の言うことなど誰もまともに聞いていません。このままでは南園は終わりだと、皆が思っています。僕はまだ十五歳ですけど、生まれてからずっと南園がだめになって行くのを見て来ました。二十二郎兄さんのお父さんがよく話してくださいる南園老の時代から、どうしてここまで変わってしまったのですか。祖父は、変えてはならないと言うけれど、変えてはならない元のままのものが、いまも何か残っているのですか。跡形もないではありませんか。何を守れと言

うのです。惨憺たる現実を目を塞いで、何もしないでいただけなのです。もしかしたら、本当に見えていないのかも知れません。だったら恐ろしいではありませんか。父だってそうです。あの人は一体何をしているのですか。いつだってあたふた動いています。いつだって深刻そうな顔をしています。それだって、何もできていないし、何もわかっていないことには変わりがないのです。情けないです。父も自分が情けないのでしょうか。いつもうなだれています。あの大きな体をぐんにやり縮めて、みっともないです。あんまり気の毒なので、笑っちゃいます。ここはもうすぐ猫親父のものです。猫親父は南園をばらばらにしてから乗っ取る魂胆なのです。あのいまましい猫はそれがわかっているから、いつも大威張りでここらを歩いているのです。悔しいではありませんか。

火が付いたように孟郊はまくし立てる。

「演殿も南園老の息子だ。能無しの孫に任せておくよりはいいと、南園老はむしろお喜びになるのではないかい。それこそ二十二郎君のお父さんは、ず

つと前からそのように言っておられた」。

「叔父上は何をおっしゃるのですか。今朝は変です」。

孟浩然是額に手を当て、自分が何を言っているのかを確かめようとする。

今朝は変なのか。菓の味も悔恨も飽き飽きだ。腹を立てるべき相手は猫ではない。

「いいかい、南園がこのようになったのは、伯父上や一郎兄さんのせいではないのだ」。

「いえ、うちの父、うちの祖父、それに曾祖父と、代々揃いも揃ってぼんくらだからです」。

孟浩然是額を強く抑えて、

「そう悪く言うものではない。南園がこのようになった大きな原因がどこにあるのかと言え、他ならぬ私にあるのだから」。

「叔父上ではありません。叔父上は、好きな詩を作って来られたのを取返して曲げて、南園のために尽くそうとされたではありませんか」。

「違う」。

言下に否定すると、俄かに思い立つ。

悔恨はもういい。薬はもう飲まない。病んだのは自業自得だ。この上は、自らを罰しなければいけない。

「君に話したいことがある。中に入って来てくれないかい」。

孟浩然が顔を歪めながら言うのを孟郊は見上げ、

「頭がかあつとなつて、ついここに来てしまいました。せつかく今朝はお加減がよさそうなのに、僕が来て、御気分を乱してしまいました。お体に触つてはいけません。何だか御様子がおかしいです。どうか、横になつて、お気を静めて下さい。僕も気持ちを落ち着けるようにします。僕はこれで帰ります。先生のことはどうか御心配なさらないで下さい。僕が頑張つて、父とどうにかします。ああ言いましたけれど、いまの南園をどうにかできるのは父だけです。御免なさい、急に来てしまつて。僕が言ったことはすっかりお忘れになつて下さい」。

孟郊は頭を下げてそのまま行こうとする。孟浩然は窓から身を乗り出してその肩を捉える。

「私は大丈夫だ。体は、この通り、よくなった。この手を離さない。このままでは帰さない。入って来なさい」。

そのまま孟郊を引き上げようとすると、背中に痛みが走る。

「叔父上、大丈夫ですか」。

「さっさと入って来るのだ」。

孟浩然是窓辺にしゃがみ込む。

「すぐにあちらから回って来ます。お願いですから、横になって下さい」。

扉が開き、入って来るのを見て、孟浩然是息を呑む。

孟郊ではなく、その母の楊義姉だ。

「ですから、巧んでは駄目と言ったではありませんか」。

「こんなつもりではなかったのです」。

楊義姉に叱られ、孟浩然は泣き出しそうになる。では、どんなつもりだったのか。

「いつまでたってもわからないですから」。

楊義姉の微笑みに、

「どうしたらいいのでしょうか」。

尋ねる前に、楊義姉は消え、孟浩然は床にへたり込む。

その腕を取って、

「叔父上、いけません、どうか横になって下さい」。

孟郊が脇にいる。

甥の力を借りて、ようやく中腰にまで体を上げ、榻に腰掛ける。

背の痛みがすつと和らぎ、息をつく。

先ほど思い立ったことがあった。病を脱したのか死の淵に臨んでいるのかわからないのならば、いましなければならぬ。

「ここに座りなさい」。

甥を隣に来させようとする。

「お休みなつた方がいいのではありませんか」。

甥は心配顔で座らずに覗き込む。

「この病になつて、我が三十年の歳月を振り返ると、後悔ばかりがある。ただその中で、大きな親不孝をしていながら、悔やんでいないことが一つある。

君は聞いているだろうか、私は妙な意地を張つたために、妻というものを持たずに今日に至つた。子孫を遺すのは、子として第一に為さねばならない親への孝とされている。どうして妙な意地を張つたのか、君はわかるかい」。

孟郊はとまどいを隠さず、

「何をおっしゃつておられるのでしょうか。僕には呑み込めないのですが」。

孟浩然は何かに衝き動かされるようにして、

「君は母の顔を知らないのを悲しく思つたりするかい。君が母の顔を知らないのを、私は君以上に悲しく思う。だから妙な意地を張つたのだろう。当時

の私はわかっていなかったのだけれど、いま君にはわかるだろう。」

「何をおっしゃっているのでしょうか。」

「そのように言ういまの君を君の母は見る事ができない。そのことを、私は悲しく思う。当時の私は、はつきりとは理解していなかった。君の母のような女性をもう一人増やしたくなかった。君の母は、もしも男に生まれていたら、いまごろは朝廷に並んでいて少しもおかしくない。南園に来なければ、天下に比類なき才女として知られていただろう。南園に来たばかりに、若くして亡くならなければならなかった。南園に来たばかりに、その才能は荅のままで終わった。だが、南園に来なければ、一郎兄さんと夫婦にはなれなかったし、君を生むこともなかった。一郎兄さんは立派な人だ。君は立派な若者だ。君の母は他の誰とでもなく一郎兄さんと夫婦になるべきだった。その夫婦から君が生まれた。君の母が君を見られないのはこの上なく悲しい。だけど、南園に来たばかりに、夫婦の絆は短い歳月で断たれてしまった。どうしてそのようにならざるを得なかったのか君はわかっているだろう。」

孟浩然はうわ言のように言葉を列ねる。

孟郊は孟浩然の肩に手を置き、

「叔父上はいま何をおっしゃっているのでしょうか。横になって、しばらくお休みされてはいかがでしょうか」。

「つまりは南園がいけなかったのだ。南園が、君の母を迎えるにふわしい場所ではなかったのだ。私にはそのことがわかっていなかった。もちろん南園が完全無欠の理想の場所ではないくらいは知っていた。問題は多々ある。それを補って余りある良さがあると思っていた。千年の伝統が我が南園にはある。南園でぬくぬくと育った私は、南園の悪いところを見ないでいようとしていたのだろう。君がぼんくらと言った代々の南園の主と同じだ。逃げて知らん顔を決め込もうと、せめて自分は妻を迎えまいとしたのだ。私がやらなければならなかったのは、妙な意地を張るのではなく、別のことだった。君にはそれがわかるだろう」。

「叔父上の話に僕はついていけないのです。叔父上、どうかお休みなつ

て下さい。落ち着かれてから、また後でお聞きします」。

「いいか、一つしかない。私がやらなければならなかったのは、自分だけが避けるのではなく、君の母が来てもいい南園を作ることだった。君の母には間に合わなかった。だけれど、南園に来る全ての女性のために、南園を作り変えなければいけなかった。一郎兄さんは、何も言わないけれども、きつと、そのような思いですつといたに違いない。一郎兄さんは懸命に頑張つて来た。それによつて南園はよくなったのか、君は十分すぎるほどにわかっているだろう」。

孟郊は唇を噛み、

「悔しいですが、父のやり方はよくなかったのです」。

「一郎兄さん以上に努力した人はいない。それでもよくならずにいるのは明白な理由がある。君はそれを知っているだろう」。

「わかっているらばどうかして変えようと思います」。

「だったら、変えようではないか」。

「原因は何なのですか」。

「さつきも言った通り、私だ。私がいけないのだ」。

「違います。叔父上は大変な努力をなさったではありませんか」。

「努力とは言えまい。そもそも誤っていたのだから。いいか、楮先生がこの南園にお見えになったのは、一郎兄さんが四歳になった年だ。かれこれ四十年以上になる。そのときの先生はいまの私よりも若かった。いまになって、先生の本当の御立派さが少しばかりわかるようになった。遅すぎる。先生は私の遙か前を歩んでおられる。そのお方が、この南園から出て行かれるようとしている。この南園が本当によいところであるためには、先生にはいたただかなくてはならない。君もそう思うだろう」。

「ですから、あの猫親父のことを僕は怒っているのです」。

「君は演殿をよく思っていない。私もそうだった。あの猫を見てはいままましく感じていた。しかし、南園をよくしようと思うならば、演殿にもいってただかなければならない」。

「猫親父は南園を乱しています。追ひ払うべきです」。

「先生にはいささか偏頗なところがおありになる。私も馴染めないところがあった。他の人よりも何倍も可愛がっていただきながら、先生から逃げてばかりいた。南園の中には先生を嫌い、敵愾心を持つ者もいる。それもやむを得ない。先生は、人の思惑など気になさらずに、信念を貫いて来られた。まことに御立派だ。先生が南園に来られたときの年齢を越えて、ますますそのように思う」。

「ですから、猫親父に怒っているわけではありませんか。叔父上は何をおっしゃっているのですか」。

「いっそのこと、皆が喜ぶのだったら、演殿にすっかり任せてしまったらいいのではないか。南園はずっと豊かになる。人は誰だって楽な暮らしを望む。私だってそうだ。演殿が南園にそれをもたらしてくるのなら、それでいいではないか。二十二郎君のお父さまは、ずっと前からそのような言っていた」。

「叔父上、どうされたのですか。おっしゃっていることがわかりません。支

離滅裂に聞こえます。どうか、お休みになって気を落ち着けて下さい」。

孟郊の手を払い、

「四郎兄さんはどうされている」。

「お家に籠っておられます」。

「それもこの私のせいだ」。

「御自分を無闇と責めないで下さい」。

「私は聞いた、四郎兄さんがあのようになったのも、私がこのようになったのも、先生のせいだと言っているらしい」。

「猫親父がそのような話を流しているのです。大叔母様も似たことを言っています。どっちも間違っています」。

「もちろん間違っている。この私のせいなのだから」。

「そうではありません。叔父上、どうかお願いですから、もう話すのはやめて、お休みして下さい」。

孟浩然は立ち、

「さあ、行こう。付いて来るがいい」。

「どこへですか」。

孟浩然は、

孝弟也者

親に対する孝と、兄弟に対する悌は

其為仁之本与

仁の根本であるのでしよう。

叔父の孟敬規が万山で唱えてくれた論語の言葉を唱える。

孟郊は孟浩然の肩を抑え、

「叔父上、しっかりとして下さい。いまは横になるのが一番です」。

「行くぞ」。

振り切って部屋を出る。

門外を歩むのは久し振りだ。窓から見ると違って青空が広い。病は確かにおさまったと感じる。しかし、それはほんのわずかで終わる。

門から出て十歩ほどで、足が痺れ始める。次第に重くなり、これまでは気付きもしなかった微妙な勾配に息が切れる。地面の方から目の前に近づいて来て、孟郊の腕にぶら下がるようにして立ち止まる。

「帰りましょう」。

「行くのだ」。

「ですから、どちらへ行かれるのですか」。

「決まっているではないか。四郎兄さんのところだ」。

「行って、どうされるのですか」。

「どうするかだと。行かなければ、わからない」。

「行かれるにしても、何も今日ではなくてよろしいではありませんか。もつとお体が回復してからで」。

「今日はすこぶる調子がいい。君がそう言ってくれたではないか」。

「いまはそうは見えませんか」。

「先生が行ってしまわれるのだろう」。

「それは、僕と父で。」

「私のせいなのだ。行くぞ。」

ここで挫けてもしも病が治らなければ、自分を罰する次の機会はない。

孟郊にしがみついて足を前に出そうとする。

「どうしても行くのなら、私の背に乗って下さい。」

「これしきの距離だ、歩けないはずがない。」

足の重さに勝たなければ孟四には会えない。

孟四は、高熱を発して試験に失敗して以来、しばらく間は、家に籠り切りとなる時期と、学舎に来て猛然と勉強する時期を、交互に繰り返した。孟浩然が病んで伏せるようになった昨年の夏ごろからは、随分と調子のよい時期に入ったらしく、表によく出るようになった。さらにはかつてない上向きとなったのだろう、人々と快活に話し、次の試験を受けるとまで言い出した。これまでの繰り返ししの波からしても、好調ぶりは試験まで続きそうだったし、これまでになく元気であったから、もう不調にはなるまい、今度こそはうま

くいくと多くの者が思った。孟四の父の孟敬通は「南園のために」と孟振に頭を下げた。孟敬行も南園の古老たちとともに、「どうかここは曲げて演殿にすがってもらえないか」と孟振に頼んだ。襄陽の有力者に働きかけたくても南園には先立つものがなかった。南園を挙げて孟四に賭けた。孟振は皆に言われ、孟演に援助を請うと、意外にもあつさり応じてくれた。事前工作はほぼ万全で、試験当日も、孟四は自信満々の様子だった。ところが、帰って来た孟四は全く別人のようで、息子の話を聞いた父は天を仰いで泣いた。

すこぶる奇怪な出来事だった。問題は孟四には易しく、頭の中で答案を練りつつ、受かったような気分で悠々と墨を擦っていると、墨とは違う匂いがした。脂粉の香りだった。横を見ると、若く美しい女が隣にいた。女は俄かに体を寄せた。「そんな難しい試験などおやめなさい」とささやき、孟四の手を取ろうとした。女を追い払った。女は孟四に抱きついた。女の息が孟子の顔に吹きかかった。孟四は大声で役人を呼んだ。「この女をつまみ出してくれ」。女は消えていた。それで、また墨を擦り出すと、「どうして乱暴なさったので

すか」と女の手が孟四の頬に触れた。役人を呼ぶと、女は消えていた。同じことの繰り返しで、役人はぷりぷり怒り、もう呼んでも来なくなった。女の悪ふざけが度を越したので孟四は逆上し、女に墨をぶちまけた。大切な答案用紙が真黒になった。

それ以来、孟四は家に籠ったままだ。

孟浩然が何としてでも行くこうとするので、孟郊は仕方なく叔父を脇から抱える。

「もしかして、あちらにいらっしやるのでは」。

小さな樹叢の向こうに人が立っている。孟浩然はじっと窺う。気持ちを定め、そこへと目指そうとするが、胸に苦いものが走り、いよいよ足がついていかない。

「頼むから連れて行ってくれ」。

孟郊に負われて近寄る。

孟四が立つその先から一段低くなって、南園の耕地が広がる。田畑の間を

小川が流れ、向こうに岷山がある。孟四の背に、これならばと確信を持つ。

孟家の人々は数百年にわたってこの土地で生きて来た。これから先も何百年にわたって生きて行くだろう。その過去と未来をつなぐ間に立つことでは、孟四も自分も同じだ。孟四の背に父と同じものを見る。

孟浩然は地に降り、孟四に話しかけようとして、声が出ない。

荒い息遣いに孟四が振り返る。後ろに立つ者の顔を認めると、すぐに背を向け、しばし間を置いて、立ち去ろうとする。

「お待ち下さい」。

かすれた小さな声がやつと出る。

孟四は一瞬止り、すぐに、今度は決然と、背を向けたまま横様に歩み出す。

もう一度、

「お待ち下さい」。

少しばかり大きな声が出る。孟四は足を止めない。

「折り入ってのお願いがございます」。

裾にすがってでもと思いはするが、上体ばかりが前に出て、ぼったり倒れる。

木の根に額をしたたかに打ち付け、急に目が覚めたように、これは夢だったのかと思う。夢は猫が庭に入って来たときに始まったのか。あのときから自分は妙なことになったようだ。

「加減が悪いのだろう。その上、怪我までして」。

孟四が吐き捨てるように言う。

孟浩然は地面を這ってにじり寄ろうとしつつ、額に手を伸ばすと、血が出ている。

これは夢ではない。

「どうか、お待ち下さい」。

孟四の足首に触れる。その瞬間、孟四は痙攣するように体を震わせ、

「何をするのだ」。

「折り入ってのお願いでございます」。

孟四は人差し指で足元を示し、

「放せ。放さぬと痛い目に遭うぞ」。

にわかには霧が晴れ、自分が何をしようとしているのかがわかる。

「結構でございます。痛い目に遭わせて下さい。この場で、命を取っていただけでもよろしいのです。病による死を待つまでもありません」。

「命を取れとな。突然現れて、訳のわからぬことを言う。病に浮かされてのことであろう。まこと気の毒な。早く連れて帰るがよからう。さあ、向こうに連れて行ってくれ」。

孟郊に言う。

「兄上がお望みであるのなら、この命はいららないのです。命に代えて、お願いを致すのです」。

「君の命など一体誰が望むのか。意味がわからない。病のせいなら許す。連れて帰ってくれ。そなた一人では手が足りないのならば、家の者を呼ぼう」。

「私が目障りであるのは重々承知しています。楮先生のためであれば、命を

差し出すのに何のためらいもありません」。

「たわごとを言うでない。君の命と先生と何の関わりがある」。

「先生は南園から追われようとしているのです」。

「何のことだ」。

「あつてはならぬことです。それで、兄上にお問い合わせするのです」。

孟浩然は孟四の前にひれ伏す。

「そなた、この訳のわからない病人に代わって、先生がどうされたのか説明しろ」。

孟郊は、

「あの猫親父です」。

「襄陽の叔父か。あいつが何かしたのか」。

孟郊は手短に答える。

「ずる賢い猫親父のせいで何もかも滅茶苦茶なのです」。

「あのお方のせいではない」。

と、孟浩然が言う。

「君はあいつの肩を持つのか。そうか、そうか、君は、昔から先生を嫌っていた。あれほど目にかけていただきながら、まこと恩知らずとは君のことだ。わかったぞ、君の魂胆が。あいつにこの南園を引き渡そうと言うのだろう。この南園などどうなったところで、世間に名を知られた君は好きに生きて行ける。むしろ南園のようなお荷物はない方がいいのだろう。あいつが引き取ってくれて、しかも、あいつのお蔭で、君も、他の連中もいまよりいい暮らしができるのだったら、そのどこが悪い。いや、最も望ましい。君の考えはどこも間違っていない。君が思うようにしてくれていい。私はどうせ気が触れた人間だ。南園にとって最も役立たずだ。君の思うようにやってくれたまえ」。

「私は、決してそのようには考えていません。先生にはどうしてでも南園にいていただきたいと思っています。南園にいていただかなければならないのです。先生がいましてこそ、南園は正しい姿でいられます。そのために兄上

のお力が必要なのです」。

「君は何を言っているのだ。君は南園をあいつに渡したいのだろう。先生に南園にいていただくと思うのなら、あいつを追い出すしかない」。

「演殿も南園老の子です。あの人が南園からいなくなったならば、南園は滅びてしまいます」。

「やはり、君はあいつの仲間だ。君は最初の日にあいつに褒められたのだろう。こんなみじめな南園に燻っているのは馬鹿馬鹿しいと君は思っている。南園を一刻も早く棄てたいのだろう。気の毒にも、君は病気になって南園で伏せていなければならなくなった。私は気が触れて、南園一の役立たずだ。君は、病になる前からずっと南園一の役立たずだった。南園のためになろうなどと、君は一度だって考えたことがない。もう私は抵抗しない。君の思うようにやってくれていい」。

「私が憎ければ、命を取って下さい。それが南園のためになるのなら、どうかお願いします」。

「この際だ、あけすけに言おう。私は君を憎んで来た。憎悪は私と君の間だけではない。この南園のそこかしこで渦を巻いている。そなたのところの祖父さん、私にとっては伯父であるあの人は、何も見ようとしていない。何もせずに放置して、それで、この私に、全部を押し付ける。私だけがどうしてなのだ。君は何なのだ」。

孟四は孟浩然を蹴る。

「兄上の気がすむようになさって下さい。私の命を取っていただいて結構です」。

「どうせ、君は病気で死ぬのだろう。君の命を取っても、南園が減びるのは変わらない。無駄はしない」。

「南園は亀裂だらけです。そこに演殿が入り込んで来たのです。演殿が悪いのではありません。南園は、あの人も含めて、一つにならなければいけないのです」。

「君はいい。君はあいつとうまくやっていける。他の者はそうはいかない」。

あいつは先生を追い出そうとしている。そのことをどうするのだ。もう話したくない」。

行こうとする孟四の足に飛びつく。背中に強い痛みを感じる。急がなければならぬ。

「兄上も郊君もよく知っているように、南園老がお生まれになったのは、隋の終わりのまことに厳しい時代でした。そのころも、あるいはそれ以前も、我が一族は、この土地に必死にしがみつこうように生きていました。腹を満たすに足るだけの食べ物があるのは稀であつたでしょう。戦乱に巻き込まれ、作物を奪われ、家を焼かれ、たくさんの者が命を奪われても、この土地で生きて行こうと、皆が力を合わせていました。数百年の間、先祖は生きるだけで必死でした。いまはどのようなでしょう。少なくとも私は先祖と違います。生まれて以来、私は他の人と同じように畑を耕して来たものではありません。それでいて腹はいつも満たされていました。一族に亀裂が走るのもっともなことではありませんか」。

「わからぬことを言う。畑を耕さずして腹が満たされていた点は私も君も同じだ。そうなりたくてなったのではない。生まれる前に一族で決めたからこうなったのだ。鋤鍬を手にする者がいて、勉学に励む者がいて、一族が繁栄すると南園老が定めた。樂をしようとは私は勉強を選んだのではない。勉学とどちらが苦しいのか、君だって知らない訳ではないだろう。真面目に働けば、春に播いて秋に収穫できる。勉学はそうではない。三十有余年、収穫のない苦しさを誰が知るのか」。

孟四は涙声だ。

「南園老が思い描いたのは、我等孟一族には成し遂げ得ぬ夢だったのでしようか」。

「君は勝手にそう言え」。

「先生は立派なお方です。私などは先生に到底及ぶものではありません。それを重々承知しながらも、先生とて完全無欠なお方ではありません。先生は南園老との約束を大事にしすぎました。貢挙の合格者を出すという目的を達

成することを全てに優先させました。先生は誰にでも見えるかたちで序列を付けて競わせました。私を第一番に置き、そのために兄上の憎しみを買いました」。

「黙れ。君が一番上だろうが何だろうが、そのようなことに惑わされたことなど、断じてない」。

「私は兄上の憎しみを買うようなことばかりして来ました」。

「君が何をしようと私には関係がない。馬鹿馬鹿しい。これ以上、君と話す気はない」。

「私の命をここに差し出します。どうかお好きになさって下さい」。

「何度も同じことを言うな。君の命が何なのだ」。

「私の首をお持ちになって、先生の前で決心をお示しになれば、先生は必ず南園に留まるでしょうし、演殿も兄上の気迫に畏れを成すでしょう。一族の者も兄上に全てを託そうとするでしょう」。

「全く意味がわからない。君の首がどうだというのだ」。

「私が憎いのであれば、私という気がかりを消して、思う存分、兄上の目指す通りになさって下さい」。

「私の目指すものなどない」。

「兄上でなければいけないのです。兄上が合格されてこそ、南園はまた一つになれます」。

「もう一度、あの苦しさを味わえと君は言うのか」。

「私は南園に生まれるべき人間ではなかったのです」。

様々な悔恨を抱いたまま病で死ぬようになったのは、初めからここに生まれるべき人間ではなかったからなのだろう。一筋の道などという幻に生きようとしたのもそうだったからだろう。

孟四は嘆息し、

「よいか、もしも、この私が南園に生まれるべき人間ではないというのではないのならば、君も違うだろう。君も私も同じだ。もともとはそうだった。

君がここに来る前に、私は峴山を見ていた。峴山を見ている間に、君のお父

さんを思い出した。そのうちに、私は君のお父さんになったような気がした。だから、私の心はこれまでになく穏やかだった。そのようなことは私にとつて初めてだった。そこに君が来て、私の心を滅茶苦茶にした」。

「申し訳ありません」。

「謝ってくれなくていい。いいか、宇宙が始まってから、岷山はあった。南園に生きて来た我等は必ず岷山を見ていた。羊祐は言った」。

由来賢達勝士

そのときから大勢の賢達、勝士が

登此処遠望者多矣

ここに登って遠く望んだけれども

皆埋滅無聞

皆、消えてしまつて聞くとくろがない。

「羊祐は岷山で悲しんだ。しかし、君のお父さんは違う。岷山を見て、その視線の先に無数の先祖を見ていた。無数の子孫を見ていた。私は今日、初めてそれを知った。無数の者の一人としてここ南園に生まれた者なら誰もが南園の地に命を捧げることが許される。君にも許されるのなら、私にも許される」。

孟四は膝を折り、孟浩然の手を執る。

「わかった、君の言う通りにしよう。先生のもとにこれより参ろう。君の首を持って行く。わざわざ切り離しはしない。胴体に付けて持って行く。ともにお願ひしよう。南園に留まって、真の学問を教えて下さいと。孟子の本来の教えに立ち返って、先生のもとで、君も私も学問を初めからやり直したい。さあ、行こう」。

孟浩然はそれに応えて立ち上がりかけ、目の前が真っ暗になる。

耳の底に一つの音が残っている。

それは足音だ。水を汲むために張子容が出て行った。いつもの一日がこれから始まる。

目を開くと、朝だ。しかし、どうやら鹿門寺ではない。身を起そうとして、ひどい疲れがある。鹿門寺での朝にこのようなことはなかった。

張子容は遠く温州（おんしゅう）にいて、自分はいつもの榻の上にいる。

いつからが夢だったのか。孟四の前で倒れ、背中を鞭撃たれたような感覚がまだ残っている。それは鹿門寺で見た夢だったのか。張子容はまだそこにいるのか。

張子容が戻って来たならば、妙な夢を見たと話そうか。夢は、張子容が鹿門寺を出ると言った晩から始まったのか。

身を起こす。案外と体は動くようだ。窓の隙間から薄明かりが漏れて来ている。

窓を押し上げる。ひんやりとした風が部屋の内に入り込む。

いつもの庭がある。誰かが来る。あの猫か。孟郊か。張子容か。

空に明けの光が兆した窓の下に、懐かしい人が立つ。

狭径花将尽　細い径に花はまさに終わろうとし

閑庭竹掃浄　静かな庭に竹が浄らかに揺れています。

声はよく知っている。

「いついらしたのですか」。

「この対句だけでは寂しいでしょう。一つの詩に、あなたがしてくださらないこと」。

楊義姉がそう言う。

「いいのでしょうか、姉上の句を頂戴してしまつて」。

「巧まずに作ってくれるのならば許します」。

「僕は張八君の夢を見ていました。詩ができたら、張八君に贈つてもいいでしょうか」。

「張八さんは、考えが深すぎて、お困りの御様子です。私が届けてさしあげましょう」。

「張八君はどうしているのですか」。

「あなた方はもう三十を超えたのでしょうか。潘岳（はんがく）が『秋興賦』を作ったのは三十二歳、賈誼（かぎ）が死んだのは三十三歳でした。難しいお年頃なのでしょう」。

「昔の名のある人とは比べられません」。

「竹林の七賢人を気取っていましたのに」。

「あれは遊びです」。

潘岳は七賢人の少し後の人で、幼くして奇童と言われ、成長とともに才名はいよいよ高まったが思うように昇進できず、三十二歳のときに、自分の鬢に白髪が混じるのを見て、『秋興賦』を作って志を得られずにいるのを嘆いた。

賈誼は七賢人よりずっと昔の漢の時代の人で、十八歳の若さで才能を皇帝に認められ、数々の改革案を提出した。国はそれを必要としたが、古参の大臣は書生談義だと冷笑し、賈誼を朝廷から追い出した。賈誼は都から遠く離れた地で二十三歳で没した。

「潘岳も『秋興賦』を作ったところに死んでいれば、よい名ばかりを残せたのでしょうか。あなたも、遊んでいられたところが一番よかったですでしょうか。そう思っているではありませんか」。

「潘岳には元来貪欲なところがあったのでしよう。でも、一族のためには出

世を求めずにはいらなかったのでしょうか。

潘岳は後に政権の中樞に接近することに成功し、皇后の妹の息子の周辺に集まった二十四人の文雅の士の第一位に数えられるまでになった。しかし、あざとく地位の獲得しようとし、私怨によつて身を滅ぼした。

「あなたもそうするおつもりなの。早くに病気で死んでおいたら、いい名が残ったとは思いませんか。巧んでしまったから、もう遅すぎでしょう」。

「姉上はいつも僕に厳しいです」。

「ええ、何回言つてもわからないのですもの。今度こそ巧まずに選んで御覧なさい」。

「何をですか」。

「窮か通か、どちらを選ぶのか」。

「それは劉芳（りゅうほう）の『窮通論』ですか」。

「やっぱりよく勉強しています。だから、余計なことを考えてしまうのでしょうか」。

「いえ、僕は、張八君のように深く考えることができませぬ。そのときその場で思い付いたことをしてしまふのです」。

「窮でもなく、通でもなく、その間があつたらいいのでしようけれど」。

楊義姉はうつむき加減に言う。

志を得るを「通」もしくは「達」と言い、得ないのを「窮」と言う。南朝の宋に生まれた劉芳は、戦乱によつて父母を失い、伯母とともに国境に近い町に逃れた。程なくそこは北朝の手に陥ち、劉芳は敵国において生きねばならなくなった。時に十六歳であつた。細い縁故を頼つて北朝の都に行き、身を立てようとしたものの、引き上げてくれる者はなく、人に雇われ書物を写すこととどうにか口に糊した。黙々と学問に励み、窮と通を超越した「中推」に立とうとする『窮通論』を著した。栄利に汲々とせず、賤貧に感感としない境地に至つたからであるうか、ついに若い皇帝に見出され、国の大改革に取り組み、北朝の絶頂期を招来した。

「僕は劉芳のようにはなれませぬし、なろうとも思ひませぬ」。

「で、もう決めたのですか。」

義姉に誘われるようにして、孟浩然は口にする。

「二郎兄さんの背中について行くこうと思います。」

二十年ほど前に、孟大に向かってそのように言えなかった。最初からそうしていればよかったのだ。一筋の道の幻を見たのが間違いであったのか。

「また深く考えもせずと言ったでしょう。」

「違います。」

「巧まないのだったら、それでもいいでしょう。」

楊義姉は微笑む。

孟浩然の心の内がからりと晴れて、すっと詩が入り込んで来る。

南陌春将暮　南の道では春はまさしく終わろうとしているのに

北窓猶臥病　北の窓辺でなお病に臥せています。

林園久不游　林園に久しく遊ばないうちに

果木一何盛　木々はまことに盛んなありさまになっています。

孟浩然が唱えると、

「その次に入れて下さるのでしよう。安心しました」。

狭径花将尽　細い径に花はまさに終わろうとし

閑庭竹掃淨　静かな庭に竹が浄らかに揺れています。

声とともに楊義姉の体が光に包まれる。

朝の陽光がすでに庭に及んでいて、

「起きていたのかい」。

窓の下に孟大が立っている。

「兄さんでしたか」。

「この様子ならもう大丈夫そうだ。心配したぞ」。

「申し訳ありません。いつから眠っていたのでしよう」。

「覚えていないのか」。

「四郎兄さんの前で倒れたとの記憶はあります。それが昨日だったのかどう

か、よくわかりません」。

「君をここに運んで寝かせたのは昨日だ」。

「御迷惑ばかりおかけして、申し訳ありません」。

「迷惑どころか、君のお蔭で、すっかり変わるかも知れない。ありがとう」。

礼を言う」。

「四郎兄さんはどうされたのですか」。

「俺と一緒に先生のところに伺った」。

「兄さんも行って下さったのですか」。

「俺は付き添っただけだ。四郎君が全部話をしてくれて、それで、先生は南園に留まって下さることになった」。

「それはよかったです」。

「先生も随分と苦しまれたようだ」。

「私がいけなかったのです」。

孟大は窓辺に手を置いて孟浩然の顔を見上げ、

「自分を責めなくていい。それが病のもとだったのではないのかい」。

「病はよくなったような気がします。病は、たぶん離れる前に最後のひとあばれをしたのでしよう」。

「そうなのかい」。

「そうですとも。病は去ったのです」。

そのように言うのと確かにそうだと思える。身に当たる朝日がこれまでになく心地よく、季節に追いつけたと感ずる。

孟大は孟浩然の顔をじつと見て、

「だったら、君に大事なことをしてもらおうか」。

「何なりとおっしゃってください」。

「ここにはうちの俸がよく来るから、聞いているだろう、俺が近頃しよぼくれていると。確かにそうなのだろう。俺はできもしないことまで一人で引き受けてしまおうとしていた。それがよくなかったのだろう。先生にも申し訳ないことをした。いまさら過去を悔いても仕方がない、要はこれからだ。だから、君にも頼みたい」。

「兄さんがおっしゃることなら何でもいたします。兄さんの背中を見て歩いて行きたいのです。それが僕の最初からの望みでした」。

一筋の道を心惑うて歩んだばかりに、遠くに行ってしまったのだろう。夢から覚めて、現実を歩まなければならぬ。

「君の前を歩けるような俺ではない。それはしてくれなくていい。頼むのは、俺が言うのだけれど、本当は俺ではない」。

「誰なのですか」。

孟大は窓辺を離れて、斜めを見上げ、

「君は、廬山は幸せだとは思わないかい」。

「廬山ですか」。

「また陶淵明の話だ。君の方がよほど詳しいだろうけれど、廬山と襄陽は縁がない訳ではない。慧遠（えおん）大師は若いころにこの襄陽にいて道安法師に師事して仏の教えを学んだ。そこに北から胡族が攻め込んで来たために、道安法師の弟子は散り散りになってしまった。慧遠大師は南に逃れて羅浮山

（らふさん）を目指した。途中、潯陽（せんよう）で廬山を遠望し、そこが求める修行の場があると直観した。廬山の近くに陶淵明がいた。陶淵明は仏弟子にはならなかったが、慧遠大師と特別の交わりを結んだ。言うまでもなく、陶淵明には廬山を詠んだ詩がある」。

結廬在人境 廬を結ぶのは人里でも

而無車馬喧 車馬の喧騒はありません。

問君何能爾 君は「どうしてそのようにできるのか」と問うので

心遠地自偏 「心が遠くにあれば、この場所も遠いのだ」と答えます。

採菊東籬下 東の垣根で菊を採っていると

悠然見南山 廬山の悠然とした姿が目に入ります。

山氣日夕佳 山は夕方がよろしく

飛鳥相与還 鳥が連れ立って帰ります。

此中有真意 この中に真の意味があるのでしよう

欲弁已忘信 それを弁じようとして、その言葉を忘れました。

「だから、廬山は幸せだと俺は言った。俺は、廬山が幸せであるように、峴山も鹿門山も幸せであってほしいと思う。」

「剣の修行をすると決意したときも、兄さんは陶淵明の詩を詠んで下さいました。兄さんはあのときにおっしゃいました。故郷の園田を詩に歌ったのは陶淵明であつたけれども、それができたのは、陶淵明に至るまでの大勢の人々の営みはその地にあつたからだ。私もその営みに加わりたいと思います。」

「廬山を仰ぎ見た陶淵明と峴山を仰ぎ見る君は同じではない。君は君だ。」
「僕は何をすればいいのでしょうか。」

「四郎君は長く籠っていた家から外に出た。俺も変わろうと思う。君もだ。今日から新しい南園が始まる。そうしようではないか。」

「ええ、力を太くわせて幾多の危難に打ち勝つてきた先祖に立ち戻りましょう。」
孟大は静かに唱える。

死徒無出郷　死ぬときも移るときも郷村から出ることがなく

郷田同井　郷村の田は井の字の形に整然と区切られ

出入相友 田に入るときも出るときも互いに友愛に満ちて

守望相助 不意の場合も互いに助け

疾病相扶持 病にも互いに扶助するならば

則百姓親睦 農民は親しみ睦むのである。

孟子の言葉だ。

「このごく単純なことが最も難しい。大元に立ち返って、まずは我等三人から始めよう。少なくともこの三人は一つに心を合わせようではないか」。

「すばらしいです。必ずそうします」。

「君はまだ完全に治った訳ではあるまい。五日の猶予を与えよう。五日後の朝に、倅を迎えによこす。一緒に来い。まだ鋤を打っていない畑が残っている。鋤の持ち方の根本から教えてやる」。

孟浩然是孟大の心を理解する。

一筋の道は洞庭湖の上に消えた。岳陽樓の詩をもう悔やみはしない。元に立ち返るにはそれが必要だった。

従兄弟二人が一つになり、それが南園全体に及ぶならば、困難は克服できるだろう。

張子容にどのように告げようか。襄陽の門の前で別れて以来、異なる道を歩いて来た。いつか張子容の道と自分の道は交差するのだろうか。たとえそうならなくても、通じ合えるものがあるはずだ。

万山で見送った鳥が消えた虚空の先はこの南園であったのだろうか。

■ 岳陽楼

開元五（七一七）年八月、岳陽楼で張説に提出した詩。張説は岳州刺史になってから才士と楼に登って詩を詠み、楼壁に掲げた詩が百余篇に及んだ。

八月湖水平　　八月の湖水はあくまでも平らに広がり

含虚混太清　　虚というものを含んで大空と一つになっています。

気蒸雲夢沢

浩然の気が雲夢の沢を蒸し上げ

波動岳陽楼

洞庭湖の波が岳陽楼を動かします。

欲濟無舟楫

ここを渡って行こうとしても舟楫はなく

端居恥聖明

聖天子の御代に端居していることを私は恥じます。

坐觀垂釣者

釣り糸を垂れる人をそぞろに見ては

空有羨魚情

釣り上げられて世に頭れる魚を空しく羨むのです。

■ 田園作

岳陽楼での詩の後、都の人々に送った詩の一つ。漢の時代の揚雄に自分を比して引き上げてくれることを願った。揚雄は才能がありながら貧窮をかこっていたが、ある人の推薦で『甘泉賦』を皇帝に提出する機会を得るとたちまち官職を授けられた。

弊廬隔塵喧

粗末な私の住いは都会の塵と喧噪から離れたところにある

唯先尚恬素
卜隣近二徑
植果盈十樹
粵余任推遷
三十猶未遇
書劍時將晚
丘園日已暮
晨興日多懷
昼坐常寡悟
冲天羨鴻鵠
爭食嗟鷄鶩
望斷金馬門
勞歌採樵路
鄉曲無知己

先祖は恬淡と素朴をひたすら尚んでまいりました。隣り合うのは古の隱者のような人々で、実の成る樹を十本ばかり植えて暮らしています。このような田舎で時の流れに任せていましたので、三十になってもよき機会に巡り遇いません。書と劍に明け暮れて、田園の一日一日は終わります。朝に起きて懐うことは多くありますが、昼に坐して悟るようなこといつもわずかです。天に真直ぐに昇る鴻鵠を羨みつつ、鷄や鶩と争つて食べているのです。宮中への門は望み見ることがかなわずに、薪を採る道で労働歌を歌っています。郷里に私を知る人はなく

朝端乏親故

朝廷にはあなたの他に親しい方はおりません。

誰能為揚雄

誰か揚雄のような私のために

一薦甘泉賦

甘泉賦を作って提出するよう勧めては下さらないでしょうか。

■ 游精思觀廻王白雲在後

王迴、すなわち白雲先生の精思觀を訪ねた後の詩。

出谷未停午

谷を出ましたのはまだ正午になっていませんでしたが

至家日已曛

家に至ると日がすでにかげっています。

廻瞻下山路

廻り見た下山の路では

但見牛羊群

牛羊の群にばかり会いました。

樵子暗相失

薪を採りに入った子が暗さに道を失ったならば

草虫寒不聞

寒さに草むらの虫も聞こえないことでしょう。

衡門猶未掩

私は門をまだ掩わずに、そのような山にいる

佇立望夫君

友人を思つて佇んでいます。

■ 晩春臥病寄張八

開元八（七二〇）年の晩春に張子容に送つた詩。

南陌春將暮

南の道では春はまさしく終わろうとしているのに

北窓猶臥病

北の窓辺でなお病に臥せています。

林園久不游

林園に久しく遊ばないうちに

果木一何盛

木々はまことに盛んなありさま

狹徑花將尽

細い徑に花はまさに終わろうとし

閑庭竹掃淨

静かな庭に竹が浄らかに揺れ

翠羽戲蘭苕

翡翠の翼の鳥が蘭の花に戯れ

頰鱗動荷柄

赤い鱗の魚が荷の柄を動かします。

念我平生好

思うのは我が平生の友が

江鄉遠從政

遠く江南の地にあつて政務に励んでいること。

雲山阻夢思

衾枕勞歌詠

歌詠復何為

同心恨別離

世途皆自媚

流俗寡相知

賈誼才空逸

安仁鬢欲垂

遙情每東注

奔晷復西馳

常恐填溝壑

無由振羽儀

窮通若有命

欲向論中推

雲と山は互いに夢に思うのも阻み

私は枕辺で労働の歌を詠んでいます。

歌を詠んで何をするのかというと

同じ志がありながら離れているのを恨むのです。

自分のいいように世渡りをするだけで

俗に生きる人たちはみな知己を得ることが少なく

賈誼は才能がありながら空しく後半生を過ごし

潘岳の鬢には半ば白いものが垂れました。

遙かな君を思う情は長江の流れとともに東に注ぎ

日の影はたちまち移って西に駆け入ります。

常に恐れるのは志を得ずに溝に填まってしまいうことで

羽振りよく出世するなどどうでもいいのです。

窮と通は運命によって定まっているようですが

その間を論じてみたく思います。